

## — 卷 頭 言 —

日本癌病態治療研究会も発足して既に9年の歳月が過ぎようとしております。

“10年一昔”という言葉があります。遠い昔の出来事のようにありますが、過ぎてしまえば束の間の出来事でもあります。

発足当時は、癌外科治療はそろそろ拡大手術の成績を基に、患者QOLを考えての縮小手術が緒についた頃かと思えます。

現時点では拡大手術により、癌治療成績の著名な向上をきたし、その手術死亡率も遠隔成績も一応の落ち着きを示しております。そこで、更なる治療成績と患者QOLの向上を求めるためには、詳細且つ正確なる診断のもとに適時適応の外科治療選択が必要であり、且つ、それに伴っての基礎的研究に根ざした分子生物学的治療、更には、予防が今後の大きな学術的進歩をきたすものといえます。

この意味においても、本学会の果たすべき役割は極めて大きく、会員の皆様方の先見性のある研究は、明日の医学、医療の基礎を、着々と築いているといえます。

21世紀の医療は遠い先のことではなく、既に現実の医療です。

皆様方の研究成果を期待しております。

千葉大学 磯野 可一